万葉集巻一三・三二六八の歌の「思」の訓をめぐって

本田義寿

宮嶋先生がおなくなりになつた。「食物は量を多くとるよりも、少量で多量に匹敵する価値のある、しかも美味いものを食べなさい」などと冗談めかして、論文のあり方を教えて下さつた先生であつた。その先生の追悼号に私ごときふつつかな者が小稿をのせていただくことになつた。量も多く、美味であるともどうにも言えそうにない。それにもかかわらずあえて書こうとするのは、「直感を大切にしなさい。そしてそれを裏付けることに努めなさい」ともおつしやつた御言葉をたよつて、私なりに感じたものを裏付けようとしているその一段階を見ていただきたいとねがつたからにほかならない。不出来の点、ただ御許しを乞う次第である。

〔一〕

万葉集における「思」という文字の訓は、「シノフ」と「オモフ」とであるが、どのような場合に「シノフ」と訓み、どのような場合に「オモフ」と訓むのであろうか。

（「思」を「シノフ」とも訓む事は、沢瀉久孝博士の万葉集注釈巻第一、《三六六頁》に示されている。）

一三・三二六八

三諸之　神奈備山従　登能陰　雨者落来奴　雨霧相　風左倍吹奴
大口乃　真神之原従　思管　還爾之人　家爾到伎也

における「思」の訓をめぐつて考えてみたい。この「思」について、万葉集大成、日本古典文学大系万葉集では「シノヒ」と訓み、本文の「思」の文字を書き下し文には「偲」の文字をあてている。新校万葉集（一二版）、小島憲之・木下正俊・佐竹昭広各氏による万葉集では「オモヒ」と訓まれている。これと同様の例がこの他に八例みうけられる。

その中の一例（一二・三〇九六）については、木下氏の「猶し恋しく思ひかねつも」（関西大学文学論集第九巻三号、六六頁）があつて、「オモフ」と訓むべきことが示されている。他の七例についてはまだどちらとも定まつていないように思われる。またそれ以外に「シノフ」又は「オモフ」と諸本が一致した訓をつけている「思」についてみても、何か疑問を抱きたくなる場合がある。そこに従来の訓詁とよばれている文字の訓をその用例から帰納的に定めて行く方法と同時に、その文字によつて示される場をも考える必要があるのではないかと思うのである。沢瀉久孝博士が「難訓難読の歌に新

発見を加える事も無論大切でありますが、何の気なしに読み過しているうちに、誤読誤解がある。そうした誤読誤解をまず正しく読み解く事が根本だと思う」（万葉集注釈巻第十付録・楽屋ばなし）と述べて居られる事も、「思」をめぐつて考える手がかりであつた。また国崎望久太郎先生が「古典に対する言葉の障害も古典のもつ一つの歴史性である。というのは文学が言葉を媒介とするという本質的制約は、その時代の言葉によつてしか表現されないということであり、その言葉は歴史的に変遷するからである。言葉が変化することによつて、しばしば古典の世界が理解しがたいものになつている」（日本文学の古典的構造・古典の本質、一八頁）と述べて居られることも、「シノフ」という場合と「オモフ」という場合との差異を考える必要があることを暗示して居られるようである。「その時代の言葉によつてしか表現されない」ものである限り、たとえ微視的な問題であるにしても正しく理解するためには、「その時代の言葉」として考えなければならないであろう。

そこで、「思」が「シノフ」「オモフ」と二通りに訓まれている場合をみてみると、大体次のように

国歌大観番号	万葉集大成	古典文学大系	新校万葉集	小島・木下・佐竹氏万葉集	万葉集注釈
三二二	オモヒ	オモヒ	オモヒ	シノヒ	オモヒ
五八七	シヌバ	オモハ	オモハ	オモハ	オモハ
一〇三一	オモハ	シノハ	オモハ	シノハ	オモハ
一四六九	オモハ	オモホ	オモホ	シノハ	シノハ
一七七六	オモハ	シノハ	シヌバ	シノハ	シノハ
一九六六	シノヒ	オモヒ	シヌビ	シノヒ	シノヒ
三〇九六	シヌビ	オモヒ	シヌビ	オモヒ	オモヒ（全註釈シノビ）
三二六八	シノヒ	シノヒ	オモヒ	オモヒ	オモヒ（全註釈シノビ）
四一四四	シノヒ	オモヒ	オモヒ	シノヒ	シノヒ

などがみうられる。この中三〇九六に関しては木下氏の論があることを既に記した。

ここで「シヌブ」「シノブ」と濁音になつている例があるが、沢瀉博士が万葉集注釈巻第一（九二頁）に「『偲ふ』は四段活用。語尾は清音。『忍ぶ』の方は四段と上二段とあり、語尾も濁音になつていたらしい。」と示され、同様のことが万葉古径三（一〇六頁）、大野晋氏の「上代語の訓詁と上代特殊仮名遣」（万葉集大成・訓詁篇上、六二頁）、木下氏の論にも示されていることによつて、「偲ふ」の意と考えられるものは「シノフ」と統一して稿を進めたいと思う。三〇九六については万葉集大成はその本文「思」のところを書き下し文に「忍」としていることなどがあつて、「シヌブ」「シノブ」がすべて「シノフ」にあたるということではない。右の表はただ「思」の文字に異つた訓があることを示すだけのものであり、この稿では「思」という文字によつて示される「シノフ」ことと「オモフ」こととの差異を考えることを主とするために、「シノフ」を用いることを許されたいと思うのである。即ち、「思」と並び用いられている「偲」と「念」とを手がかりとして、「思」がどのような

場合に「シノフ」であり、どのような場合に「オモフ」であつたか、それを「その時代の言葉」にかえすことによつて、少しでも正しく理解する方向に進みたいとねがうからである。

〔二〕

古事記伝巻十四（本居宣長全集第二集、吉川弘文館・大正一五年再版・六七六頁）には「志奴夫」について「恋志奴夫と（万葉に偲字などを書て志多布と云に同じ）、堪志奴夫と（俗にいふ許良閇流、堪忍するこれなり）、穏志奴夫と三つの意あり、恋志奴夫と余の二つとは意いと遠くして相わたらず、本より別言なるべし」と記してある。

武田祐吉博士は万葉集全註釈（一巻六六頁）に『シノブ』には数義がある。㈠忍耐する、㈡思慕する、㈢想像する、㈣賞美する、（中略）元来この語は想像して思慕するのが本意であろう。」と述べて居られる。

沢瀉博士は万葉古径三（一〇四頁）に「偲ぶ」と「忍ぶ」について右の古事記伝の説及び攷証・古義などの説をひかれ、「『偲ぶ』の意と『忍ぶ』の意と本来別言に見るものと同言と見るものと両説あるようであるが、ともかく『しのぶ』という言に三つ又は四つの意があるという風に見られている。」と示され、更に（同一〇六頁）「『偲ぶ』と『忍ぶ』、当時別の言葉として用いられていた事がほぼ推察せられる。」とも示して居られる。

また万葉集注釈巻第一（四〇四頁）に一・六六の「偲」について、「漢字としては『しのぶ』の意はない。これは『人を思ふ』の意で、我が国で造つた文字で漢字とは別字と思われる。『椿』同様である。この文字、人麻呂及び人麻呂集に最も多く用いられ八例を数える。或いは人麻呂の用いそめたものかとも考えられる。家持は一度も用いていない。」と示され、同巻第六（二二〇頁）に「『思久』を童蒙抄にシノバクとして古義・新考などそれによつているが、『偲ふ』は何かの縁にふれて『思ふ』であり、ここはその縁は示されていず、結句の『思ふ』（念）と相対していてオモハクと訓むべく、思う事の意で、あと三句でその思いの内容を述べたことになる。『偲はく』と訓んで偲ぶことよと切る解釈は当らない。」とも示して居られる。このようなことをみてみると、「思」という文字によつて示される「シノフ」と「オモフ」はやはり異つた意識によつて支えられたものであり、万葉の人々は「思」という文字を用いながら、その場によつて「シノフ」又は「オモフ」と区別して訓んだであろうことが考えられるのである。

そこで「思」をめぐる「偲」と「念」とはどのようなものであつたかを考えてみたい。

二・一九九　天之如　振放見乍　玉手次　懸而将偲　恐有騰文

一三・三三二四　天原　振放見管　珠手次　懸而思名　雖恐有

とある。「思」を「シノフ」と訓むことは万葉集注釈巻第一（三六六頁）に示されていることではあるが、「シノフ」と訓む場合には「偲」と同じ意味であつたらしいことが考えられる。その「偲」は

一一・二四六〇　遠妹　振仰見　偲　是月面　雲勿棚引

一一・二六六九　吾背子之　振放見乍　将嘆　清月夜爾　雲莫田

名引

一二・三一四五　吾妹児之　阿乎偲良志　草枕　旅之丸寝爾　下紐解

一二・三一四七　草枕　客之紐解　家之妹志　吾乎待不得而　嘆良霜

などがあつて、「偲」と「嘆」に親近するものが考えられる。このことは伊藤博氏が万葉集序説に立脚して、「万葉集相聞の世界・万葉の恋」（六六頁）に「相手を偲び恋することがすなわち『嘆き』である」とされていることも同様だと思う。そしてこの親近性は「偲」という文字ばかりでなく仮名書きの例、

二・一三一　夏草之　念思奈要而　志怒布良武　妹之門将見　靡此山

二・一三八　夏草乃　思志萎而　将嘆　角里将見　靡此山

においても認められよう。この一三一と一三八について松田好夫氏は「人麿作品の形成」（万葉二五号・二二頁）に「推敲の折の、或は改稿の時の人麿の感覚が活いていようか。」とされ、一三八を未定稿、一三一を定稿として「一三八と定稿と、これも飛躍的形成である。将嘆ではあまりにも低調散漫な表現、妻は人麿の面影を胸にひしと抱いている筈であるから、志怒布良武でなければいけない。」と言われる。「嘆」では低調散漫であるかどうかは別として、とにかく「嘆」と「志怒布」とに関連の深いことを感じて居られるようである。これらの点において「偲」と「嘆」との親近性が考えられるが、「嘆」はまた「オモフ」「コフ」に対する場合もあつて、「偲」とのみ関連づけて考えることはできないようである。

とはいえ、ひとまず私は「人を思ふ」の意であると言われる「シノフ」は「嘆」をその背後に持つものであるとしたいのである。「嘆きつつ思慕する」「嘆きをとかしこんでいる愛慕」と考えておきたいのである。

それでは「念」との関連はどうであろう一・二五及び二六をみると、新校万葉集及び万葉集大成では、二五、二六ともに

隈毛不落(堕)二六思乍叙来　其山道乎

とあるが、万葉集注釈では、二五、二六とも

隈毛不落(堕)二六念乍叙来　其山道乎

となつている。そして、古典文学大系万葉集及び小島・木下・佐竹氏共著万葉集では

二五　隈毛不落　念乍叙来　其山道乎

二六　隈毛不堕　思乍叙来　其山道乎

とある。「シノフ」と訓む「思」と「偲」とが等しいものであつたように、「オモフ」と訓む「思」と「念」とが全くかさなりあうことが考えられる。しかるにこの二五・二六と類似している一三・九二九三においては

間不落　吾者曾恋　妹之正香爾

とあつて、「山道乎」が「妹之正香爾」にかわると同時に「恋」があらわれている。

一三・三二五〇　念戸鴨　胸不安　恋列鴨心痛

一三・三三二九　恋鴨　胸之病有　念鴨意之痛

とあつて、「偲」と「嘆」に考えられる親近性と同様のものを「念」

と「恋」とに認めることはできないであろうか。

伊藤氏は万葉集相聞の世界（六六頁）に『偲ふ』は『恋ふ』よりもいささか主体性の強い動詞で、元来は、眼前の対象に対していう『賞ふ』（賞美する）と同語であるが、万葉集では、目の前にあるものを縁にして離れているものを思う意に使われる場合が、たいへんに多い。その限り、『恋ふ』にきわめて近接した意を持つ動詞であるといっていい。」と言われる。「偲ぶ」と「恋ふ」が用法において似ていることは万葉集注釈巻第一（一八一頁）「思努布」の訓釈の項で示されているのであるが、意味としては新校万葉集で

二・一一二　古爾　恋良武鳥者　霍公鳥　蓋哉鳴之　吾念流碁騰

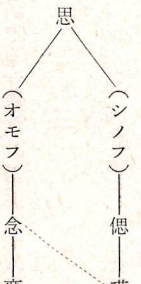
とある歌が万葉集注釈では

二・一一二　古尓　恋良武鳥者　霍公鳥　蓋哉鳴之　吾恋流其騰

とあるのにより、万葉集注釈巻第二（八七頁）に「『思ふ』は『恋ふ』とは同じでないが、『念』の文字が用いられているように（古径二、一四六・七頁参照）、深く思い入ることで、この場合の如きは『恋ふ』というに近く、自分が一途に思いつづけておるように、というので、」と述べて居られるように考えるべきであろうと思う。

勿論これらは似通つた意味をもつものであつて、その境界を歴然と定めることはできないことであろうし、また定めたとしても恐らく無意味であろう。「恋が、離れているときに生ずる嘆きである」という伊藤氏の記述もあるとおり、「恋」と「嘆」とは密接な関連を持つものであろうし、「嘆」を手がかりとして考えるならば、「偲」と「恋」とは「近接した意味を持つ」とも言えるであろう（一三・三三二九）。また記紀において「恋」の字に「シノフ」と訓をあてられていることもあるのをみれば、このことも充分に言えそうである。

然しながら「思」という文字をめぐつて「偲」と「念」の差異を考えようとするここでは、今まで述べてきたことによつて次のように図式化し、「偲」と「念」とは異つた感情ではあるが、それが「思」によつて表記され得たのは点線の関連によるものであると考えることはできないであろうか。



くどいようであるが、「念—恋」と考えたい理由をもう少し記そうと思う。それは、万葉集注釈の二・一一二の訓釈によるものであることは既に述べた。その他に、「シノフ」が熟合語をつくるのは「シノヒコト」「クニシノヒ」などの極めて少数の限られた場合のみであること、一方「オモフ」「コフ」は互に「於母比孤悲」（一七・四〇一一）、「思恋」（一九・四二一四）、「念恋」（二・二一七）と熟合し、また「孤悲念乎」（二・一〇二）ともあること、そしてまた、「オモフ」も「コフ」も多くの他の語と熟合した例がみられることによるのである。なおその上に、「シノフ」は「天地之弥遠長久　思将往」（二・一九六）、「永世乃　語爾為乍　後人偲爾世武等……語嗣　偲継来」（九・一八〇一）、「千世爾物　偲渡登」（一三・三三二九）などとあつて、永遠に続くものであるようにみえる。「コフ」の場合にも「日月毛不知　恋渡鴨」（二・二〇〇）

とみえてはいるが、「故非和須礼我比」（一五・三七一一）、「恋忘貝」（六・九四六、七・一一四七、一一四九、一一九七）、「恋忘草」（一一・二四七五）などがあり、「オモフ」についても「思忘時」（六・九一四）があつて「忘れる」ことがあるように思われることも「念―恋」と並べた一つの理由なのである。

万葉集においては特殊な熟合しか示さなかつた「シノフ」ではあるが、源氏物語には「恋ひしのぶ」となつて四例あらわれる。「うへの女房なども、恋ひしのびあへり。」（対校源氏物語新釈巻一、桐壺）、「故権大納言のはかなく亡せ給ひにし悲しさを、飽かず口惜しきものに恋ひしのび給ふ人多かり。」（同巻四、横笛）、「東の対を、その世のしつらひを改めずおはしまして、朝夕に恋ひ偲び聞え給ふ。」（同、匂宮）、「など忘れがたみをだにとどめ給はずなりにけむと恋ひしのぶ心なりければ」（同巻六、手習）である。これらは「シノフ」ではなく「恋ひしのぶ」であるけれども、それがやはり「何かの縁にふれて自分の心にある人を偲ぶ」（万葉集注釈巻第一・一八一頁）ことであり、「飽かず口惜しきものに」「その世のしつらひを改めずおはしまして朝夕に」恋い偲んでいる。即ち、嘆を織りまぜつつ、忘れずに「弥遠長久」シノフことであつたらしい。なお「偲」が一例、「若君を見奉り給ふにも、『何しのぶの』と、いとど露けけれど、かかる形見さへならましかばとおぼしなぐさむ」（同巻一、葵）、「偲び所」が一例「君が住む故にはあらで、ここら年経給へる御すみかの、いかで偲び所なくはあらむ。」（同巻三、真木柱）とあつて合計六例、そのすべてが、縁にふれて既に亡き人を偲ぶことである。この他に「シノブ――」という熟合語は数多く用いられてはいるが、それらが「隠――」であり、「忍――」であることをみると、万葉の時代の「シノフ」について考えられている三つ乃至四つの意味が、いつしか「偲」と「忍」とに統一されつつ王朝へと流れこんだことが考えられよう。土橋寛先生が「万葉集―作品と批評」の「万葉原論」（一六六頁）に「シノフ」について「恋思の情は遠いものに対する場合ほど痛切であるから、意味が特殊化してきたのであつて、それはアハレが悲喜の両方にわたる感嘆の意味であつたのが、悲の方に特殊化して行つたと同じであつた。」と示されているように、人々の生活に密接に結びついた「偲」と「忍」が大きく捉えられたものであろうと思う。

以上のような立場において、私自身まだ考えなければならないと思う点を持ちながら、先に示したような図式化した系列を、「思」をめぐる一段階として考えてみたのである。

〔三〕

「シノフ」の意味として、武田博士の言われた㈠忍耐する、㈡思慕する、㈢想像する、㈣賞美するというのは既に記したが、「元来この語は想像して思慕するのが本意であろう。」とも述べて居られることによつて、㈡と㈢とを一つにまとめて考えてみようと思う。そして宣長のいうように「恋志奴夫と余の二つとは意いと遠くして相わたらず、本より別言なるべし。」とあることを思いあわせ、㈠を「忍」（シノブ）とし、㈡㈢と㈣とを「シノフ」とまとめて考えることにしたい。（シノブ）と「シノフ」の差異については、「万葉

古径三」、「上代語の訓詁と上代特殊仮名遣」、橋本進吉博士「古代国語の音韻に就いて」（明世堂、昭和十八年五月）などに述べられている。そこで（シノブ）をここでは別言として一応除外し、㈡㈢と㈣について、即ち「シノフ」の対象を人事と自然とにわけて考えてみたい。

土橋寛先生は「万葉原論」（万葉集――作品と批評、創元社、一六六頁）に、「いつたいシノブというのは、空間的時間的に遠いものに対する愛慕の情をあらわす言葉である。記紀のクニシノビ歌は倭建命（または景行天皇）が異郷にあつて遠い故郷をシノブ歌であり、（中略）クニシノビ歌も歌詞そのものは国ぼめの歌に過ぎないのであつて、クニシノビの原義はクニボメであると考えていい。」と述べて居られる。また「必ずしも遠いものに限らず、単に賞美の意にも用いる。」（同）とも示して居られる。これによつて㈣及び自然に対する「シノフ」を考えれば、問題は㈡㈢及び人事に対する「シノフ」になる。すなわち、「偲、これは『人を思ふ』の意で、我が国で造つた文字で、漢字とは別字と思われる」とある「人を思ふ」について考えることが、最後の問題といえるであろう。

「偲」の用いられている例を番号によつて示すと大体次のようである。

六六、一九九、二二五、四八一、（一〇六五）（一一〇六）（一一一一）一二七六、一二九四、一八〇一、二〇九〇、二三三四、二四六〇、二四六三、二九六七、二九八一、三〇六一、三一四五、三三二三、三三二四、三三二九、三八六二。

この中（　）で番号をかこんだ三首に用いられている「偲」は、自然を対象とし、賞美する意味に用いられているものである。そこでこの三首以外の「偲」についてみると、「空間的時間的に遠いものに対する愛慕の情をあらわす言葉である」ことがまず考えられる。ところが、「偲」は「思」という文字によつて記されることもあつたのである。

「思」は「偲」と異つてもとより漢字である。その用いられている例も多く枚挙にいとまがない。その「思」を「オモフ」と訓む場合、それはどのような意味を持つものであつたのだろう。

一一・二七六一　奥山之　石本菅乃　根深　所思鴨　吾念妻者

とあり、その「念妻」には

一一・二五一五　布細布　枕動　夜不寐　思人　後相物

という「後相物」という再会の期待がかけられるのであつた。「能知母　久美泥牟　曾能渋母比豆麻」（記・九一、古典大系）ともうたわれる意識があつた。そして「オモフ」によつて、

一一・二五六九　将念　其人有哉　烏玉之　毎夜君之　夢西所見

その人を夢に見ることができるのである。「相思ふ」場合にのみそれができると感じられていたのであろうか、

一一・二五八九　不相思　公者在良思　黒玉　夢不見　受旱而宿跡

のようにうたわれることもあつた。

一一・二四七九　核葛　後相　夢耳　受日度　年経乍

とあることも、「後相」を含んで「受日度」のであるように思わせ

る。夢に見ることは相思つていることのしるしであり、それがまた現実に再会し得る期待をもつものであつた。一二・二九五九、三一〇八などこれらもまたあまりにも多い。こういう点からみれば、「オモフ」の対象は現実の人であり、同時に再びあうことが予想される人である。その期待を持つことのできる人である。それが

一二・三一〇七　空蟬之　人目乎繁　不相而　年之経者　生跡毛奈思

となり、また

一一・二五四四　寤者　相縁毛無　夢谷　間無見君　恋尓可死

などともあるように、再会を期待し得るにもかかわらず、何らかの障害によつてそれがかなえられないとき、「生跡毛奈思」という状態に陥り「恋尓可死」様想を呈するのであつた。

一三・三二八一　吾背子者　待跡不来　鴈音文　動而寒　烏玉乃宵毛深去来　左夜深跡　阿下乃吹者　立待爾　吾衣袖爾　置霜文氷丹左叡渡　落雪母　凍渡奴　今更　君来目八　左奈葛　後文将会常　大舟乃　思憑迩　現庭　君者不相　夢谷　相所見欲　天之足夜爾

反歌

三二八三　今更　恋友君爾　相目八毛　眠夜乎不落　夢所見欲

ともあつて、夫の来るのを待つていたけれども寒さはいよいよきびしく、これでは今夜はもう逢えない。だがあの人は夫、相思う人。「後文将会常　大舟乃　思憑」み得る人。しかし現実には今夜は逢えない。それならせめて夢にだけでも私に逢つて。とでもいうのであろう。再会を期待し得るにもかかわらず一時的な障害のために逢うことができない。であるからこそ反歌三二八三では「恋」のであるように思われる。その障害が一時的なものでなく永続的であるとき、「恋」はいのちにまむかうものとなつて激しい。

一三・三二九七　玉田次　不懸時無　吾念　妹西不会波　赤根刺日者之弥良爾　烏玉之　夜者酢辛二　眠不睡爾　妹恋　生流為便無

そして「恋」は

一三・三二八七　乾坤乃　神乎禱而　吾恋　公以必　不相在目八

方とあるように、「神乎禱」ることによつて「必」逢い得るものであつた。「神乎禱」るのでなくても、呪物としての黄葉を手折りかざすことであつても、やはり「恋」はかなえられるものであつた。

（拙稿「万葉集における黄葉」論究日本文学一六号）

そこに私は「シノフ」と「オモフ」との差異があるように思うのである。

国崎先生は「漢文学の教養をもつた人麿の出た時期は、不幸にして古代からの葬送儀礼が、仏教儀礼にとつてかえられようとした際であつた。天武天皇の二年三ケ月にわたる盛儀を誇る葬礼の中で、僧尼の発哭や発哀などは十回以上に及んでいる。そして持統以後は仏式に変つたし、文武・元明・元正以下、歴代の葬儀はみな火葬になつた。火葬を行うのに鎮魂歌的意義をもつた挽歌を諷誦する意義の薄いことは容易に知られるであろう。」（日本文学の古典的構造・柿本人麿・一〇七頁）と示され、高市皇子への挽歌について、「この挽歌形式は、挽歌が死者の功業に対する頌辞や歴史的回顧を必要

とする点からいえば、まさにその定石をふんだものといえよう。けれども万葉集の例からすれば、挽歌の中にその人の歴史的功業を叙述することは極めて珍らしい例であつた。ただ追慕哀悼のこころを歌えば足りる約束ではなかつたろうか。それが以前はそのままで鎮魂儀礼の諷誦としての目的を達した。」（同・一〇六頁）とも述べて居られて、今更私ごとき者がとやかく言うべきことは全くないであろう。ただ私はそれを次のように考えてみたいのである。

「追慕哀悼のこころを歌えば足りる約束」と述べて居られるところに、「シノヒ」とでもいうべき古い日本の呪的儀礼があつたのではなかろうかということである。敏達の時代に外来の誄がとりあげられるまでの葬送儀礼を思うのである。誄が宮廷の公式儀礼として行われ、仏式が主軸をなすにいたつて「シノヒ」は表面からはその姿を消さざるを得なかつた。とはいえ、挽歌が挽歌であるためには本来もつていた呪的宗教的な色彩を全く失つてしまうことはできなかつたにちがいない。古代の民俗を背景にして万葉集の歌の多くが成立しているのと同様に、誄や仏式が公式の葬送儀礼として成立するためにはその背後に「シノヒ」を持たなければならなかつたであろう。そして人麻呂は、彼の集団とともにその「シノヒ」をうけつぎ支えていた最後の人であつたということである。

「偲」という文字について「或いは人麻呂の用いそめたものかとも考えられる。」と言われていることも右のような推察を行う一つの暗示である。

上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難。已因訓述者、詞不逮心。全以音連者、事趣更長。（古事記序）

万葉集巻一三・三二六八の歌の「思」の訓をめぐって

とも記される時代であつた。漢字によつて日本語を書き表わそうとするとき、誄はあつてもそれとはやや異つた古代日本の「シノヒ」に相当する文字は見出せなかつた。だからこそ人麻呂は「シノフ」という言葉に最も近いと見られる「思」をとり、また「偲」を用いはじめたのではないかと思うのである。万葉集に挽歌という言葉は多いけれども、誄という語が全くあらわれないところ、公式儀礼としての誄は考えられたが人々の心に深くあつたものはやはり「シノヒ」であつたと考えることはできないであろうか。そんなことが、「偲」「思」「念」の混用となつて表われたのではあるまいか。当時の人々にとつても「思」によつて「シノフ」を示すことはまだ安心できなかつたのかもしれない。仮名書きの例が約六十、圧倒的に多いのである。

本田義憲が「柿本人麻呂に於けるかるのみこ・かるのおほいらつめ（そとほしひめ）物語歌」（奈良女子大学文学会研究年報一、二二頁）に古事記のよみうた二首について、「霊魂へのよごとに対し、その魂を慕（しの）びよびその復活をねがうという鎮魂曲であつて、分化した形で言えば哀歌（dirges）挽歌（lament）に属すると想像するのである。換言すれば、殯葬または墓前に於いて祭式的な劇的所作（drōmenon）とともに歌われた言語詞章（legomenon）であろう。」と記しているその言語詞章ともいうべき「シノヒ」が人麻呂の中に流れ込んでいた。しかもその「シノヒ」は、人麻呂以外の人々にとつては既に意味をうしなつたものであつた。「偲」という文字を「家持は一度も用いていない」ところにそれを思うのである。

「シノフ」の意味は忘れさられようとしていた。しかしながら「偲」は

二・二二五　直相者　相不勝　石川爾　雲立渡礼　見乍将偲

とあるように「直相者　相不勝」の状態に至つた時、ここでは雲を縁として「偲」ということになるのであつた。若し「直相」ことを予想し得るならば、「偲」でなく「オモフ」であつてもかまわないようである。

二・四八一　白細之　袖指可倍氐　靡寝　吾黒髪乃　真白髪爾
成極　新世爾　共将有跡　玉緒乃　不絶射妹跡　結而石　事者不
果　思有之　心者不遂　白妙之　手本矣別　丹杵火爾之　家従裳
出而　緑児乃　哭乎毛置而　朝霧　髣髴為乍　山代乃　相楽山乃
山際　往過奴礼婆　将云為便　将為便不知　吾妹子跡　左宿之妻
屋爾　朝庭　出立偲　夕爾波　入居嘆合　腋狭　児乃泣毎　雄自
毛能　負見抱見　朝鳥之　啼耳哭管　雖恋　効矣無跡　辞不問
物爾波在跡　吾妹子之　入爾之山乎　因鹿跡叙念
反歌
四八三　朝鳥之　啼耳鳴六　吾妹子爾　今亦更　逢因矣無

も「シノフ」が「逢因矣無」という状態において感じられたもののようにみえる。一々の歌について述べることは煩雑になるばかりであるからそれはしないけれども、結果には何等かわりはない。が、雑歌の中から一つ考えてみる。

七・一二四八　吾妹子　見偲　奥藻　花開在　我告与

の歌について、武田博士は全注釈の評語に、「推測すれば、妻を亡つて後に詠んだものであるかもしれない。しかしそれらの作歌事情が明白でないので、完全に歌意を釈することができない。」と述べて居られる。この「妻を亡つて後に詠んだものであるかもしれない」と推測されたことは、まさにそのとおりであるとも言うこともできよう。ただ「亡つて」は再会を期し難い状態であると解するのが適当なのではなかろうか。代匠記（七之上）に「藻の花のうるはしきをみて妻におもひよそへてなぐさまむとなり」とあるのがよいようである。「シノフ」は単に死者（死者というのはどうかと思うが、）に対してだけでなく、「遠妻」を「シノフ」こと（一二九四）もあつたからである。即ち「シノフ」によつて示されるものは、再会を期し難い、人間の限界を超えていると思われる遠さであるともいえるであろう。

以上要するに、「思」は「シノフ」とも「オモフ」とも訓まれる語であるが、人を対象として用いられた場合について愚考してみたのである。

「シノフ」と「オモフ」とは非常に近く、似通つた意味をもつ語である。即ち、「時間的空間的に遠いものに対する愛慕の情を表わす言葉である。」

その中で「シノフ」という場合、対象となる人は既に亡き人であるか、あるいはそれに類する人、人間の限界を超えた遠さを感じさせる人であつた。現実に再び逢うことを期待し得ない人であつた。その人に対する「嘆」を含む愛慕であつた。そしてまた、かつて自分と一つに結ばれていたその人との関係が、遠く離れた場所にあつても、かつての時とひとしい心情で結ばれていることを、再確認することでもあつた。忘れることのない永遠の愛慕であつた。

それに対して「オモフ」という場合、対象となる人は生きている人、自分の身近に感じられる人であつた。現実に再び逢うことを期待し得る人、遠さというよりもむしろ近いことを感じさせる人であつた。それはまた相思うという状態をその完全な意味と考えることもできる言葉であつた。

〔四〕

そこで最初にあげた一三・三二六八の「思」はどう訓むべきであろうか。

その反歌三二六九の

還爾之　人乎念等　野于玉之　彼夜者吾毛　宿毛寝金手寸

の「念」とも呼応し、またこの歌が相聞の部にあることをも背景にして、「オモヒ」と訓むべきであろうと思うのである。

古典文学大系万葉集では既に記したように、「シノヒ」と訓んで、その頭注に「私を思いながら帰つて行つたあの人は」と口語訳を示してあるけれども、口語訳だけがよくてどうも不安定な感じであつた。「オモヒ」と訓むことによつてそれが落ちついてくると私は思う。武田博士（全註釈）も「シノヒ」と訓まれ、釈の部に「自分を思いながら」とされ、訳において「物思いをしながら」と記して居られるが、やはり「オモフ」と訓まなければ、訓と解釈とが、ととのわないのではないかと思う。代匠記は「オモヒ」と訓んで「思管より下は夫君の雨風に相つつ還れるを恙なく家に到りつやと想像なり」としている。特に「思」にはふれていないけれども、「夫君の」と記しているところに、契沖が「オモフ」の意を感じていたであろうことが推測される。

若しこんな考えが許されるなら、三二六八の「思」ばかりでなく、他の「思」の訓をももういちど考えてみたいのである。

はたしてこの小稿が、「その時代の言葉」にかえしたことになつたかどうか、はなはだおぼつかない。美味であるとはどうも言い難い。ただ私なりに感じたものを裏付けようとしている一段階を見ていただいて御教示を御願いし、また、私なりに宮嶋先生をシノフよすがとしたいとねがうばかりである。

なお京都女子大学の塚田満江先生は無理な願いを御聞き入れ下さり快く書物を拝見させて下さつた。付記すると共に、御礼申しあげる次第でございます。

（一九六三・一〇・二五）